

高等学校教育変革のときに

県高等学校長協会会長
(県立岡山大安寺中等教育学校長)

起 塚 郁 夫



本年度は、各校とも猛威をふるう新型コロナウイルス感染症対策に追われ、これまで経験したことのない不安と背中合わせの一年間でした。学校間での情報共有、教育庁との綿密な連携のもと、いかに感染を防ぐかに知恵を出し合いました。時を同じくして、県立高等学校では一人一台端末を所持しての学習が本格的に始まろうとしています。

新採用の頃、ある先輩教員から、「入学した頃に比べて、教育するだけ生徒は元気を失っていつているじゃないか」と言われたことが今でも記憶に残っています。「教育」とは、知識・技能の修得や人間形成のための訓練を意味し、一方、「エデュケーション」は、子どもの元々ある能力を大きく引き出す、あるいは、新たな能力を引き出すことに重きを置いた言葉です。

高等学校の普通科目においては、生徒の主体的な学習が長年要請されてきたにもかかわらず、教授することに大きなウエートが置かれてきました。しかし、今後ICT活用が本格化すると、様々な考えを瞬時に共有でき、

友人の意見を参考に自分の思考を更に深めることが容易になります。復習的な意味合いの強い課題についても、反転学習に見られるように、授業に参加するための前提となっていく気がしています。そして、基本的な事項を身に付けた上で、課題を追究する授業が主流となるはずで。

教員には、深い知識、教養を土台としながら、生徒の活動を構成する力や問いを発する力を磨くことが求められます。生徒が、学ぶに値する、面白いと思える課題、さらには社会で生じている様々な問題に対する解決方策を追究できる課題でなければなりません。そして、そのような授業づくりは、主体的、対話的で深い学びを促進し、様々な評価場面を生み出します。

コロナ禍にあつて、ICT活用が必須の能力となりました。人口減少社会を担う生徒たちに必要な力は何か。社会を後追いする教育でなく、時代を牽引する力を引き出す取組を工夫したいものです。

